

假名讀十四經

假名讀十四經治法

凡例

一此編や衆書中の最も良きものと採りて集
て上下の卷に朝鮮の許任が説ふ據もれ多い。
間々積歳の經驗と載る。

一國字と以て直讀ふ記すれは讀易ううんが爲
たり童蒙の行は岐路なれと示す。

一篇中僅ふ藥物と載するれは針灸の及ばる處と
補ふに敢て自分窮ふところ只す心棄ふ忍ぶる
爲たり。覽もの若し能これ意を加へ方を需り證

小對て効と收しふ小補ありん

一〇置は門中の諸症と頒其急は臨んぐ見易かりん
んぐ為なり△置は愚按なり蓋皆據あり也混見事なれ
一編中口授口傳とありぬ敢て秘するふあり耳提せ
され諭しかり故小口授なり

一死と起し生と回すもの俞穴あり俞穴刺され効な
し故小下卷は圖翼と載す腹脇手足骨度の寸尺
と記して俞穴の分すを知しむ全く骨度正誤の圖
説に従ふなり

卷之上 目錄

一 鍼灸之大意 二 中風門 三 中寒門

四 中暑門 五 中濕門 六 火症門

七 癰疾門 八 嘔吐門 九 積聚門

十 水腫門 十一 疝氣門 十二 淋病門

十三 頭痛門 十四 心痛門 十五 腹脇門

十六 脚氣門 十七 眼目門 十八 口齒門

十九 咽喉門 二十 耳病門 二十一 中毒門

卷之下 目錄

一 銅人形總圖 二 癰疽門 三 騎竹馬穴法

四 腸癰門

五 疔腫門

六 蒜灸法

七 附子灸法

八 石癰門

九 丹毒

十 蟠蛇瘰

十一 大小便

十二 腰背門

十三 咳嗽門

十四 膝脚門

十五 手臂門

十六 鼻病門

十七 痢疾門

十八 痔疾門

十九 勞瘵門

二十 四花丸法

二十一 小兒門

二十二 五癰門

二十三 婦人門

二十四 風癩門

二十五 急死門

二十六 草度方

二十七 禁針穴歌

二十八 禁灸穴歌

二十九 針灸吉日

三十 針灸忌日

假名讀十四經治法卷之上

津山彪編次

一 鍼灸之大意

內經に曰く大に勞と刺し、飢と刺し、

大飽と刺し、醉と刺し、驚と刺し、怒

人を刺し、又曰く形氣不足のもの或は久

病て虚損もの若し針を刺し、重て其氣を竭と。又

曰く針入るに僅に芒の下をさへも氣のいづれ

車軸の如く△是も針の眞下より補ひ無と

ばかり九灸をすべし平且より午後に及ぶべし

穀氣虚乏、（一）大筋脈絡、（二）細線の若くすれば竹節頭と云つて
べー大筋脈絡、（三）細線の若くすれば竹節頭と云つて
炷、（四）是を以て四肢、（五）は但し風邪と去すれば灸多
く炷、（六）べ七壮より五十壮までして止む、（七）年の數
に隨つて過るゝと得ざるを以て然るゝと臍の下、（八）冷
症瘕氣塊積氣の証、（九）艾炷の大小、（十）耳、（十一）故、（十二）ふ
腹脊、（十三）は五百壮と灸て、（十四）唯巨闕鳩尾の穴の如きは是
胸腹の穴、（十五）とて灸て五十壮を過るべしと止む
心カ無、（十六）頭頂の穴も亦多く灸するゝと精神と
失、（十七）臂脚の穴に多く灸ては血脉枯渴て肉瘦毛枯て
手足力を、（十八）又精神も失を、（十九）蓋、（二十）穴處に淺深あ
るゝ、（二十一）淺穴、（二十二）多く灸するゝと、（二十三）必筋力を傷る故、（二十四）に
三、（二十五）五、（二十六）七、（二十七）壮は遇ずして止む、（二十八）醫者、（二十九）深く慎て鍼灸
と施、（三十）べ、（三十一）必、（三十二）忽、（三十三）ふ、（三十四）す、（三十五）ん、（三十六）乎

禁忌

○生冷 鶏肉 酒 麴 房勞等の物

○中風門 のせにあり

△夫中風の證に於る劉河間、（一）火と主、（二）東垣、（三）氣

と主。丹溪の濕と主。後世に至て種々の論辨あり。今これを載て益す。故に略も脉の大法は沉なり。其の吉なり。急疾なり。大數なり。一。○中風寒を夾じ。其の浮遲と帶を暑を夾。其の脉虛を濕を夾。其の脉浮なり。○卒中なり。言ひ。肉痺して人事を不知なり。神道の穴に灸す。三百壯すれば立。其の差べ。○遍身麻。其の語言し。其の口眼斜。其の喎つるを。其の間使。大迎。三里。兼漿。合谷等に灸す。二十一壯。十五日を約して治べ。○遍身痒く。其の行ぐ。其の但快く。其の忍び。其の或の呵ひ。其の嚏。其の眼口斜。其の等なり。合谷。三陰交。曲池。神門に針入。七部。而して後肘の尖に灸す。七壯。神効あり。○言舌寒。其の半身遂。其の或の左右。其の癱瘓。其の久。其の愈。其の委中の穴。其の三稜針と入。其の二部。惡血數升と出して治。若くは輕症のもの。其の風市。絶骨。三里。曲池。肩井。列缺。委中等に灸す。毎日五十壯。七十日と約して治。神効あり。○中風。晴と予視。語言し。能く手足屈伸。其の脊の第二推。其の五推。其の上。其の七壯。其の文柱の大。其の裏の核。其の丈。其の柱。其の神効あり。△中風の証。内傷に因る。外の風邪に因る。多。其の役。

するもの甚く而真氣と虚。或ハ憂ハ怒の積て其
氣と傷るもの卒に目眩つて倒し手足癱痺と眼口喎て
斜。舌強りて語言不能等ハ必ず針術と數く施す
へうと。反て其精神と竭し命期と促るに至る慎むべし
ま肩井曲池三里絶骨風市列決等ハ中風の妙灸穴
と之と虚証の中風は多く炷べし三七壯と期
し。但藥液の中と補ひ氣と益見し。或ハ防風羌活
天麻半夏木香等の内より順多して手足に真陽の回
と候りて後多く針灸すべし深く虚實と認て施すべし

③ 中寒門 かんにあつる

△脉緊盛をうするハ陰陽より盛なり。法ハ針を用ひ
て經絡と通下るるを薬と用りて當に汗する。與
るべし。汗を命を傷る。醫忽ふまふべし。○五臓に寒
氣中して口禁して語言不能なり。手足強り冷氣
刺く。痛む。臍毒下陷。泄痢腹脹大便あり。ハ
黄蘗あり。或ハ白く或ハ黒く又ハ清穀あり。ハ神闕天
樞に灸する。七壯而後參朮乾薑の溫劑と投
て効を奏し。神の。○寒氣濕氣に因て干する
敢て艾火の及べきふちハ參朮附薑の類ハ有す。ハ効

と斂んや

④中暑門 あつさふあふ

附リ霍亂上吐下瀉

△凡中暑の疾汗一下ぐぐぐ但熱を解し小便を利する
と肝要なり或い其甚ぐぐぐ即ち死せんす忽ち口
禁して語言し能くも身體反張して四肢動ふるあり
此時芭豆も腹中に内しを得ぐ血華も咽み下され俱
に効をい豈に艾火の尊くは知らんや急は兩乳の上に
灸する七壮妙効あり而して後其脈虚微なり附子
劑を施べし若し弦沈たれば桂枝白朮猪苓澤瀉の類
口の乾も咽の渴も小便の赤く澀り大便の瀉も止る
はするる○中暑霍亂して上吐下瀉下瀉は悶亂
けうろく胸腹大に疼んで苦楚忍びぐぐぐ合谷
太冲神闕は七壮つ火を下して忽ち差るる妙
○又方臍の上三寸に三壮三焦俞合谷太冲等に針し
て後關衝に三稜針を入る一部血を出せば立とる
に差○轉筋しつゝ筋動き掣急なりい疼を神に
しゝ或い上吐下瀉して霍亂する先急は委中
關衝を刺して血を出す。さうされ轉筋腹に入
て心は衝遂に死につるものなり医忽ふやべうん

○霍亂ハツランすて心満ココロミて腹痛ハライと食クハと吐ハクと腸鳴チヤウメイもれども中
脘チュワン内ナイ關カン關カン衝シュウより皆血ミナクヒと出デて効キウと奏ソウる○暴ヒキに大便ダイベン
泄瀉セツヤする間使マカシの穴アナふ灸シユする七壯シツシュウ若カハく愈ユルるに
更に炷タテべー○霍亂ハツランして已スに死シくても若カハ暖ナツメであ
れりれい兼山ケンサンと云イハふべー此兼山コノケンサンの穴アナ所トコロの脚カクの膻腸タンチヤウ
の中央チュウヤウに當アて分肉ブンニクの間マと脚跟カクコンを去サく七寸シチスンにあり
是コノと起死キシの穴アナと名ナけて死シくを起オコすの妙穴ミョウアナ所トコロなりこ
とふ灸シユする七壯シツシュウ忽タダニち獲ツキる神カミの道ミチ○又方
鹽シホと臍シの中に填ウツり其上カミふ灸シユする二十一壯ジュウイチシュウすべ

五 中濕門チュウシツモン ちろきにあり

△脈マツはうて緩ユルきり濕表シツヘふりて沈シヅムうて緩ユルきり濕裏シツリ
にう其傷ケガレや一身イツンしく痛イタりふり身重ミシヅメく
腰コシ手足倦怠シヅメして步行フツギョウたりか悪寒アクカン發熱ハツネツ吐瀉トヤり
ふり腹痛ハライ身ミ體大オホふ重オモシくたり○曲池キョクチ陰凌インレイ
泉合谷センガツ肩井ケンセイ肝俞カンユ陽明等ヤウメイトウふ針ハリする五部氣ゴブキを引
て經脉キヤウマツふ通スべき能ス疾ハヤシを治ナゲルす能スるが
宜ヨシく獨活ドクカツ羌活キヤウカツ防風フフウ蒼朮ソウジュツ陳皮チンヒ桂枝ケイシの藥ヤクを服ハクして表
發ハツして經キヤウを通スり氣キを泄セす速スベクに効キウあり

六 火症門カシヤウモン ちろにあり 附發熱ツキハツネツ

△火症の疾よりや一身に熱し肌を燎く
脈多く浮きうて洪數其發するや虚火の上焦に鬱
るよりなり又實火なるより其脈沈みて實大こ
しは冷きよりなり多く食し陽氣伸ずて致す處
をて○上焦燎く頭面に瘡を生し風熱より腫
痛し中脘關元石門期門等に針す○風熱に
て齒痛し齦を腫るより其痛むを針して氣を
洩す○肝經に血少く脾胃瘦く肝火動
る熱の往來するより天樞否根の穴を治す○三焦
の實より水腫に熱するより三焦に針して水と利
し血を取て治す

⑦瘡疾門にり

△凡瘡一日に一次午前と發する邪氣陽分にあ
るより日を隔て或は三日を隔てするより午後或
は夜に發する邪氣陰分に入るより又日夜に
亂と發するより氣も血も俱ふ虚よりなり

脈弦數に多く熱強なるより多し寒し心得
る○寒多く熱少く口苦く咽乾き大便秘し
便赤く洪く手臂より發する間使三間に三壯効
あり○頂頭きのちより發するより痛の日に當

て未發するも百會大推の夾に灸三壯一時に焼く
忽ち治る艾の火と寒の候やふ作るべし

○寒冷なるものを多く食し脾胃は滯り鬱りて瘧を
發しあつひに脾胃虚しやうに弱き人の患ひしうふに
神通に七壯絶骨に三壯○瘧瘧ふ瘧水おひ瘧
血等塊りとなく腹脹のあり脹痛むる月の
三日と廿七日ふ期門に針して後灸する二十
一壯神効あり

八 嘔吐門 附 翻胃 吞酸 呃逆

△凡嘔吐する症は陰氣上へ逆て陽氣の勝るに
より致すものなり又心腹痛んで嘔するものなり
寒熱より致すあり或は痰飲の腸胃に客とせりて致
すありそれ病に後嘔するものなり其主する疾と
療するは嘔は自ら止む醫者切ふ其因て來り可と
察せん何の効あり有ん○下閉て大便やば氣上
へ逆せし嘔吐するは關格の症とす宜し四關の穴
を針して幾次も瀉すべし○腹中に冷氣を舍んで
嘔吐するは中脘内關に針して陽氣を揺る三陰
交に針と留りて呼吸十二息大ふ神効○乾嘔するは
尺澤中渚隱白章門間使乳の下一寸等に灸三壯

○氣膈に否々食進々々脊の七九痛々は膈の俞
重中間使ふ三壯○吐まんとして吐まん心俞○嘔
吐忽々寒くならん熱して心神煩りきふは中院
商丘大推中衝絶骨○虚人の常に食進々々て
嘔る氣味ある脊の第七八九推の膈々両方に灸
五百壯即効あり○噎氣呑酸は胃中の熱と膈上の
痰相逆々々清水と嘔吐々中脘膈俞に灸すは
△胃口冷へ手足も冷へ呃逆するは中脘に灸す
二十壯大効あり然れども是等の症は針灸乃
能治すにあらば丁子乾薑桂枝良薑枳実の
類と温服して良効あり湯液に因て針灸と與め
一然るるは愈むるの病をさむ

九積聚門 ちくつん

△積はつむい訓聚にあつまるの義々々氣血の
何日々々積て塊となり或は集て結りて腹中
々々好々々の名なり五積の差別あり々々針
灸の治療多くは同ト○痞悶とつ々々下快く脹
るはふ覺へ按して痛きと痞塊と々々專る
痞根の穴に灸すは此穴は脊の第十三推の
下と左右へ隔々々各三寸半多くは左邊に灸す

若左右より一塊あり左右と焼べー毎日二百壯より三百〇臍下に結塊ありて碗の大小の或ハ盆の或ハ新久を問はず關元間使各々三十壯太冲太谿三陰交合谷等に灸三壯腎の俞に年の壯病者若一月と焼ハ果して病の塊は消散すべー〇疼積として塊あるは肺俞は百壯期門は五壯脊の第六椎の下七椎の上骨とけりて右邊は壯べー小腸の核のたうて二十一壯神効あり〇奔豚氣とて小腹痛積あり是ハ腎水の虚より發の積うて二種あり一ハ奔豚とて動氣下を發し中脘上院と敲上るを俱に腎の積あり脇章門に百壯腎俞に年の壯氣海に百壯期門は三壯獨陰に五壯太冲太谿三陰交田根み各々三壯約する五十日と焼て治すべー若く輕症のものに二十一日と治す〇腹中の積塊上へ行より中極に百壯懸樞の穴は三壯これハ第十二推の節の下より伏して取べー〇積氣熱を貯ふは動氣臍の傍を生じて心先へ上る氣聚て塊とす〇脊の第七九の推より或ハ腰を周りに鬱重〇或ハ痺〇或ハ咳嗽出て大便難〇症あり腎俞に年の壯肺俞大腸俞肝俞太冲等より二十一壯三十日と焼て腹中に脹

悶と覺へざれば、日に百壯より二百に及ぶ。數日して
灸一万壯に至ると、積根すてふ絶て、生滯積の患ひ
なく、○積聚ふ五種あり。伏梁、息貫、肥氣、痞氣、奔豚。い
づれも俱に臍病に屬し、聚は臍病と主る。皆艾火を用
ひて効あり。唯其急に發して腹を及び、心下を攻
むるは、鍼術と施し急に治すべし。天樞、章門と刺し二
す即効あり。

⑩ 水腫門 〰〰〰〰〰

△夫水腫の疾、其症多し。〰〰〰〰〰。一大要領は、虚実と
見て治すべし。針灸も効を奏す多し。〰〰〰〰〰。其治
法は、食を減じ、塩味肉味を禁じ、能其方症と對して
平易の行氣利水の劑と投ずれば、通身鼓の〰〰〰〰〰腫脹
する〰〰〰〰〰必連に驗は奏す。然れども、虚腫の類は、脾
胃大に虚乏、水と制する〰〰〰〰〰能〰〰〰〰〰精臟虚冷〰〰〰〰〰致す
それ〰〰〰〰〰決して針灸を用ゆる〰〰〰〰〰其治法は、大抵附子
の入る藥方と証は對し、照して與ふべし。易く治せ
ず、元脾胃の氣和せし〰〰〰〰〰水皮膚に妄行して、小便利
せし〰〰〰〰〰浮病〰〰〰〰〰。方書は〰〰〰〰〰水分の穴と針して、水
盡す〰〰〰〰〰斃る〰〰〰〰〰あり。然れども〰〰〰〰〰浮腫甚〰〰〰〰〰とれは、飲食
ろろがやゝ、腹は太鼓と抱ふ似て、氣促〰〰〰〰〰。神岡〰〰〰〰〰

已に死せんくするあり。其時急ふ救べ。○三棱針にて
水分の穴と刺し、水を出し、取し、三分の二ツをり。脹下
アて脇の辺ふり。未と水と掲すふ至らば急く血竭
の末。又は寒水石の末と針の穴へ塞付し、即ち塞て
水止せり。○浮腫の人陰莖陰卵俱ふ腫るればなり。臍
外骨に針して多く水と出せば安し。水絡とて刺さ
れ、水能出づ。△水絡の觀候口授。若し初心の輩ら
妄ふ鍼し過て血絡と刺し、大ふ血と出し、止べざる
至る。恐る。慎む。血絡の疹候口授。○惣身及び
面も手足も浮る脹て、洪大なる内踝の下、白き肉乃
陰ふ灸する。三壯能脹と銷し、小便と利す。○水腫膜
脹る。水分三陰交に灸百壯。陰驕に七壯。○手足面
目のありは。人中合谷照海絶骨下三里曲池等
み針す。五ア。又中腕に一す。七日うて腫銷し、神安
し。食と進む妙。後艾火を用ひて再び發せしむ。口傳
（土） 疝氣門

△疝に種々あれども。大抵寒熱の二種に差て治すべし。
○疝氣忽ち逆して、大ふ心腹と急痛り。同昔んで呼吸
通てが、急なる急なる足の左右の甲根に三棱針と入
る。一ア血と取る。大冲。内太冲。三壯。獨陰ふ

五壯神効あり。○疝毒伏々然うて動氣を發し。上臍よりして鳩尾に逆て遂に胸と突て氣促し。將に死せん。急ふ麪粉水小鉢で解のこを臍の四畔に置き妙塩を衡り厚さ五アけりてうす灸す。二百壯より二百に至る。艾炷の大小。灸の接りも作す。微温なるを以て度とす。○陰頭痛は太敦。太冲。腎俞。陰交に灸す。○陰戸痛は曲泉。氣衝と治す。陰腫て挺出せば。曲泉。氣衝。陰驕。崑崙。太敦等に灸。二十壯。好効あり。△疝の病十に七八は寒。屬は烏頭。附子。桂支。羌活の類能治す。針灸は其間に突出して効を奏す。

（五）淋病門 及び遺尿 遺精 白濁

△淋病は五臓の不足より。膀胱に熱を貯り致す。濕毒の熱蒸來りて水道通ず。淋瀝て出ば。或は尿水豆の汁のこりあり。或は沙石。或は冷淋。或は膏蜜のこり。或は熱淋。或は血出あり。○絶骨。太冲。氣海。中極。百壯。曲骨。七壯。二十一壯に至る。○老人氣虚。淋病を患ふは。脊第七九の推の間を一寸半。各二十一壯。○小便赤く流れて閉て通ず。及び熱淋。血淋。或は酒の後。房事を行きて病より。氣海に二百壯。臍下一寸半に灸五十壯。手の左右の曲池。小五

壯五日と約して治さる。○知を精の遺るあり。夢見遺るあり。腎俞に二十一壯。陽關に五壯。○遺尿は氣海石門に百壯。八髎に五十日約す。十日と焼て治さる。然も飽食するに治さる。食するに日に合半。食を減し胃囊を細くして治す。△金常に瓜華を用ひて一吐せし。胸膈と疎し。後食を減すと七日。體多微く瘦くを見て。烏頭附子。破胡紙の類と服さる。屢々面眩は似るもの。治を得る。瓜華と共く増減あり。病者の面色と照して用ひ。口授。○偏通あり。白濁あり。これ出づ。服海期門。陰陽。腎俞。三陰交。皆灸する。二十一壯。神効あり。

⑤ 頭痛門

△凡頭痛と治すを欲す。手足の諸陽經と刺す。針へ氣と引に功あり。譬バ湯の沸と止む。金下の薪を抽て。然も疼厥の頭痛のしき。氣と引く。必ず頭部の穴に灸す。即ち能瘥する。何ん。其熱して艾の性熱するもの。之に灸するに其熱して發散する。或ハ寒下する。灸と施す。其寒して温む。和す。又諸陽經と瀉す。欲する。先百會の穴に針して。必に諸陽

の熱氣を引て下に行ひしめたり。譬へ硯滴の上れ
と開く。然も熱極む氣と下にし能くしめ
あり。即ち三棱針と以て其頸部の血絡と刺して血を
垂らし、薑のてしすれ神効あり。△頭痛其因て来すれ
るは多端あり。一舉て論うがじ。大抵は巢滿梁門
關門と幾し。針瀉して効あり。唯其頭痛するころの
經穴考へ前後左右は隨う。手足の經穴と刺す。

⑤ 心痛門 并に胸痛

△心痛多くは氣鬱に因り熱をなす痛とせん。心真
痛の如きは針灸藥咒の能治する所非ぞ。其發る
をり。心胸卒に疼痛して悶へ苦し。或は汗大に出。或
は手足の爪の甲俱に皆青色。其急するところ發して
朝に死む。之に類する症あり。針灸藥の及ぶ所なれば。
醫の豫るところあり。其二を初して初心に便す。○心
微く痛で汗出苦し。若早く治せざれば眞の心
痛にうつ。俱ふ多し。三棱針を用て神門列缺間使大敦
を刺て多く血を取棄へ。○胸痛んが冷き酸さ水を
吐く。あり。尾窮骨に灸五十壯。足の大指の内。初の
節の横紋の中に三壯。即効あり。○痰厥して胸痛する
。或は胸腹ともに痛は。脊の第三推の下。四の推の

上に近きと量る。脊骨の上より兩傍へ各々四分に灸二十一壯より五十壯に至る。立ててより愈奇く如くの神効あり。○年久しく胸痛くは。足の拇指の爪の甲の根の當中に灸七壯。男は左。女は右。章門に七壯。太冲。獨陰。五壯。立ててより愈。或は愈されば更に焼べ。○腹中に陽氣微くして冷氣心と衝て痛り。或は痰沫と嘔。大便頻りに利。んて。快く通る。或は腹中俱に痛くは。脐の下六寸。兩傍の淵。各々一寸。すつに灸す。二十一度。○又方蠟燭を以て病人の口の兩角を一寸。夫と三指にす。三角。一角と以て。脐のふち置る。兩角は脐の下に垂。した。兩傍の端に點記と附て灸二十一壯。神効あり。立ててより是。

△是病急に救され。三四日の中に死す。大病の後。或は老人。若し是症と發。ば一兩日。死に急。す。丁子。乾薑。芍薬。を服。して。後。艾火を施す。針を刺。して。氣を脱。す。常に門生。ふ。針を禁。ず。針。り。腹内に下りて。痛。忽。止。り。あり。忽。死。す。丁子。乾薑。而。香の咽。より下。り。回。陽。す。甚。速。く。なり。○心痛んで。涎。を。吐。く。數。日。う。て。愈。され。ば。必。に。三。

俗名詞
まあり。是蟲と取まひ涎の多きも止心の痛も止なり。上腕に灸するも七壯。十二日して治と。三蟲と取の法。口授。胸中へ瘀血逆て治す痛あり。診候口傳。下三里。内關神門。太淵に鍼して即効あり。○心痛んぐ口禁するも。期門に三壯。陰卵の下。十字の紋に五壯。

五 渡脇門

△夫脇腹の痛患も種々あり。實痛のもの。腹硬満みして按く疼ど。死血の脇下に引き痛む。聲をせし疼。下り痛。乍ら止は熱綿をきて増減するは寒なり。宿食は内に腹痛するも。傷て後ふ痛も。臍を虫積の痛。甚しくても。食するを止む。則止む。飢えては痛む。左の脇に塊ありて痛む處と移るは死血右脇に塊ありても。多食積なり。治法は一梁一かじりと。一二と載て。○胃脘痛うは。肝俞。脾俞。下三里。胸俞。太冲。獨陰。兩乳の下。各々一寸に灸二十一壯。○冷物と熱物と調和するは。臍を遠く。疼絞る。天樞に一百壯。氣海に二十一壯。即効あり。○腹大に脹て堅くして身悶。臍及び小肚脇けり。堅き。水分。中極。各々百壯。腎俞に年の壯。太冲。三陰交。中脘等に。毫鍼す。○腹脇手足脊諸處へ流注して其痛刺さるゝ忍へざるなり。皆瘀血の清血ふ誘引て

流し注ぎ。暫く所と定て輒に移て更うをり。宜しく三焦針と申て其痛む所々に隨て刺し四五穴。血を取捨る。糞のこゝろより神効あり。

⑤ 脚氣門

脚氣の論ハ孫真人盡す。外臺は曰く飲食の毒自然に丹田に滯て致す。之を治るは△是と以て爲次く獨て脚氣の繁華は多きは厚味の物の毒。下りて穀營鹽膈の類ひ都て美味は制しなは其味厚くして胃中に入て銷散し易くは素より動作す。人にも多きは厚味。胃中に鬱滯し食毒自然に積り動氣を生じ。疾しきる。因て來すとては胃鬱により故に浮腫する。十に七八。治法は浮腫の有無に依りて。下りて麥飯赤小豆を食マ。塩と禁し。飽食と禁し。胃力を弱し。と一大要領。麻黃獨活羌活防己石膏大黃の類方と選。方證相照して汗と多く取て。胃氣と疎し水道は利すと肝要。脾下の動氣止る。病治る。若し汗多亡陽。醫の失あり。汗多亡陽と恐る。汗多を治るは下医。○中脘に針して胃氣は洩る。風市。伏兔。膝眼三里。上簾下簾三陰交。絶骨皆灸る。腰骨より上は灸と禁。○鶴膝風

口齒門 并に唇舌

經に曰く脾氣ハ口に通じ口臭ハ内熱口乾ハ或ハ
瘡と生ずル脾熱に属スヤ唇舌牙齒俱ハ其因テ病セ
ル異ニシテ脾熱胃鬱ハ属スル居多故に部門
と頒ズルヤ○齒痛ハ疼痛齒ハ冬七壯即効あり然
トモ凍レんハ灸ト加ヘテハ必附骨疽ト患ナリ○
上齒の疼ムハ下三里ハ冬七壯効あり○下齒の痛ム
ハ合谷に灸七壯奇効あり○又強ク齒ハ急ニ丁
子甘艸の煎汁と漱んで即効あり又方麝香と痛む齒
ハ附テ妙効○虫喰齒ハ瘡と生シ腐ト爛ルハ
策醫ハ冬テ七壯妙ナリ○口噤ヅリ牙車閉ゼ
ルハ上關頰車に五十壯神効あり○重舌舌強ト
テ食スルハ能ハズルハ神門隱白三陰交々針灸
して効と歛む○口中血出ルハ上星ハ五十壯風府
に針三部○口中舌ハ白ハ蛾口の瘡と生
ずルハ大抵血熱の致スルヲ兼漿營宮と治セ
ベシ或ハ桑の汁と塗テ忽ち治スル○口中膠の
粘ルハ大豁と治ベシ○唇乾燥ハ細の
テハ多く陰虛火動に因テ迎香虎口に灸スル

咽喉門

△夫咽ハ物と嚥候ハ氣と候。氣喉穀咽ハ是也。
若一熱府の寒冷ヲ則ハ咽門破々々聲嘶々々
○咽喉腫テ熱塞一吞飲鼻より還テ出ルハ臑谷
合谷并ふ久々針ヲ留メ即チ瀉ベ一○喉腫テ
胸脇の下支満々々中渚絶骨内關合谷神門尺澤
皆俱ニ針シテ効アリ○單蛾ハ天窓の穴頸の大筋
の前曲頰の端一陷々中ヲ針ト以テ深ク患ハ
々々の喉の内ニ刺シ一二すげり至テ暫シテ即
チ出テ神効アリ○雙蛾ハ天窓尺澤神門下三里太
谿并びニ針ス一少商及び大指の爪の甲の後根ニ
三稜針と刺シ三次若一病急々ハ一日に再び針モ
大に効○一切の實火々々咽腫と痛々々其疼處ニ
針シテ幾々も瀉ス一○喉痺腫疼テ言語々々
々々ハ三稜針々々挑ギ破テ血と出ス一腫ハ破テ
痛々々針シテ數々血と取ベ一

③ 耳病門

經ハ曰ク耳塞々々噪々々ハ九竅通ズルハ心神最
も竅々通ズ故ニ心病々々ハ先耳噪々々鳴々々遠聲聴
々々々△或ハ又精虛々々耳聾々々鳴々々又虛火逆
々々痰氣耳の中に鬱一或ハ閉或ハ鳴々々氣鬱一舌滿

痰盛に咽の中快くみたり又厚味と常に食し胃火盛
うて両耳聾りの或は瘡毒愈て後餘毒も耳聾るあ
る針灸の全く治すも能くはるも一二と載る

○耳鳴と耳痛で響く頭みる或は目眩て輒ら
神寢く晝夜大苦んぐ止むる聾の筒の長さ
五すけうろと耳の孔は挿く諸索麩の粉と水に
練て泥のてして彼耳に挿入る筒の四畔と蜜封
し外に出る箇の頭より艾と置きて灸する七壯
左り痛むる右ふ炷右若し痛むる左ふ炷し妙駁
あり妙○耳鳴て遠く聴く能はる心俞に三十

壯と五十壯に至る○耳聾るは先百會の穴と
刺し次ふ中渚後谿下三里合谷腕骨崑崙等に針は
くし留む腎俞に二十七壯り年に隨て壯と為
に至る○五臟虚乏し心神勞役て體羸瘦て耳聾る

る腎俞に二十一壯心俞に三十壯日と遂て治す
○諸の虫若し耳に入ら藍の汁と一滴下して又
葱の汁と内くし○蜘蛛の耳に入ら鹽かけりと
耳の内に搽まは即化し水く妙○蜈蚣耳に入ら
鶏の肉を以て耳の邊に置べ自ら出る又猫の小便を
灌べ即ち出る猫の牙ふ生姜と搗りて小便其儘する

すゝゝゝゝゝゝ

(三) 中毒門

△凡物食して忽ち痛むは物毒ありて胃化するにあらず
故に胃中に受てて胃口に溜ひ滞るゝは痛む
多く吐て止べゝ又物食して一二時と遇ゝ或は一
日を経て臍下臍傍に疼むは物毒ありて胃化せず
腸胃に滞て痛あり下して治すゝ針灸の能及ぶ所
にあらず薬と用べゝ又河豚の毒中なるは毒に酔ふ
あり血と吐ゝ既ふ已に死すゝも必に葬るゝ
但四五日と經て蘇るゝ多あり譬へ酒ふ酔ふ同
く毒醒ると蘇生すゝ又サく中て心中快くゝ

腹痛せば急に胆礬の末と湯に拌立吞べ其儘吐逆
て愈べゝ或は血葦もゝ○食毒心下に滞るゝ疼痛
或は悶々苦しむ幽門通谷の邊より針して逆まゝ
上へ鳩尾ふ向刺べゝ忽ち吐く物盡て治す△予
先年阿波の州に遊んゝ河豚の毒に中てゝ已に死
人と見ゝ既死なり針灸更に敷ゝ中湧泉
神闕何の應ずゝ有ん況乎湯液の咽ふ下づゝ手術
をゝ親屬相集ゝ葬と議す一日一夜と經て遂に棺
に斂り柩と申に至ゝ何ゝ頭微く顛を見え驚て予

とて珍む。乃ち心下微陽と覺ふ。然も手散
口開ひ素の。かて葬に忍ぶ。更に一日と經
ふ。心下の微陽竭と三日に至り。遂に獲て。得
たり。後とて語。彼と聞ふ。是の。人の類間。中
毒の輕い。兩三日重。四五日と過て。生と圓す。の
多し。豈卒葬とせんべけんや。

假名讀十四經治法上卷終